# アウグスティヌス的形而上學の將來（ヂルソン）

長澤信壽

茲に譯された論文は聖アウグスティヌスの死の千五百年を記念して出版せられた論文集 Mélanges Augustiniens, Paris, 1931 にエチエンヌ・ヂルソンが寄稿したものである。原文の標題は L'avenir de la métaphysique augustinienne となつてゐる。詳細な研究ではないが、特にトーマス主義との關係を明確に把捉して、アウグスティヌス的形而上學の意義を明らかにしてゐると思ふ。若し人がヂルソンの詳細な見解を知らうと欲するならば、彼が一九二九年に公にした Introduction à l'étude de Saint Augustin を讀めばよいであらう。尙ほ文中、（ ）でかこまれたもの、及び引用羅典語の譯は、蛇足となることを恐れながら、譯者が附加補言したものである。

聖アウグスティヌスの死の千五百年祭は、更めて歷史家や哲學者達の注意を、彼の著作の上に向けないではゐなかつた。此れを機として既に多數の著述が現れたが、來る年には尙ほ一層多く現れることであらう。しかしどれだけ現れても過剩になることは決してない、それは先づ第一に、多數のあのやうな著作を全く個々の人の努力が究め盡すことは困難であるからであり、次に取り分けて、彼の著作の性質そのものが、彼を研究し消化しその探究の結果を他の人々にも傳へる解釋者の共同勞作によつてのみ、生命を有することが出來るやうなものであるからである。けれども此の解釋の仕事は、根本的に重要ではあるが、それは鑑賞と評價との補足的な仕事を待つて始めて行はれる。此の千五百年祭は、過ぎ去り、整頓せられ、追ひ越された敎說の存在を歷史的に證明するに終るで

あらうか、それともそれはアウグスティヌス的思想にとつて生命の力の來復を、生命の力の新たなる時期の到來を告ぐる第三・第四の誕生を知らしむるであらうか。此れこそ我々が爰に考へようとする問題である。そして聖アウグスティヌスの思想は、今日も尙ほ、初めに有つてゐた能產力の何ものかを保存してゐるか否か、それともその思想は最早歷史家達を樂しましむるにふさはしい好奇心の對象たるに過ぎないか否か、を我々は問ふのである。

## 一、障　碍

アウグスティヌス主義には尙ほ何等かの將來があるかを人が疑ふのは當然であるかも知れない。先づ第一にアウグスティヌス主義は基督敎哲學である。此の名義は單に彼の哲學が基督敎徒の哲學であることを意味するだけではない、何となれば我々には基督敎徒であり哲學者であつて、而も基督敎哲學を有たないことも可能であるからである。此れは事實あつたことであつて、ルネ・デカルトはその甚だ好い一例である。反之、聖アウグスティヌスの思想を特徵づけるものは、啓示が彼にあつては源泉であり、規則であり、合理的思想の糧であることである、彼は信仰が理性を生むものであること、敎理は敎理としてそのまゝで哲學を生むものであることを信ずる。しかし決して彼は信仰と學とを混同するのではなく、また哲學と神學さへ混同するのではない、何となれば敎理を信ずることや、敎理がふくんでゐる歸結を合理的にそれから演繹することは、現代の實證主義者にとつてそれが哲學することではないと同樣に、彼にとつてもそれは哲學することではない。しかしながら理性によつて信仰を迎へること、信仰のうちに於て合理的に自省すること、超自然的にして超越的なる光の助けによつて觀念の體系――それはそ

の本質に於ては純粋に合理的であるが、しかし此の光がなければ不可能である――を打ち建てること、爰に彼が常になさうと欲して而も不思議に成し遂げたものがあるのである。

併し乍ら此の成功そのものがアウグスティヌス主義の道に今日立ち塞つてゐる最も重大な障碍の一であることを、人は見逃してはならぬ。nisi credideritis, non intelligetis（信ぜざれば汝等は知解せず）は一切の基督教哲學の特典（シャルト）であるしまた永久にさうであらう。基督教の思想體系を、單に反基督教的思想體系から區別するばかりではなく、基督教とたゞ兩立するに過ぎない體系からさへ區別するものは實に此〔の言葉〕である。けれども、周知の如き精力をもつて此の言葉を宣布し反覆しながら、聖アウグスティヌスは哲學者達の社會から遠ざかつたやうに見える、その哲學者達の根本的原理によれば、謂ふ所の哲學は悉く理性にのみ從ふべきものである。我々が聖アウグスティヌスに神の存在を證明することを求むる時に、彼は却つて我々に先づ神を信ずることを求める、我々は哲學者である限りの資格を失はないで、我々の同時代の者に、此れと同じ要求をなすことが出來るであらうか。また若しアウグスティヌス主義が基督教的信仰を、その必然的條件として想定するとすれば、精々、基督教徒にとつてそれはよい哲學たるに過ぎぬといふ結論を下さなければならぬやうになりはしないであらうか。

しかしもつと困難な問題がある、かくの如き哲學が、基督教徒にとつてさへ、またカトリック教徒にとつては尚ほさら、尚ほ善い哲學であるか何うかゞ、當然問はれるであらう。人は「アウグスティヌスの追放」に就いて語つた、けれどもそれは間違つてゐると我々は信ずる、何となれば我々の間にはアウグスティヌス主義者が常にゐたし、

また常にゐるであらうから。しかし、聖アウグスティヌスは哲學者としての限り、多數のカトリックの思想家たちの精神のうちに於ては疑惑と一種の冷遇とを依然として受けてゐるが、かゝる疑惑や冷遇を掩蔽することは最も根本的な知的率直を缺くことであらう。若し我々の誤認でないとすれば、極めて明瞭な事實である此の狀態を惹き起した原因は、複雜で且つ多數である。此の諸原因を辨別するためには、アウグスティヌス主義の完全なる歷史――聖アウグスティヌスその人の〔思想の〕大洋に附加せられた一つの大洋――〔を通觀すること〕が、必要であるが、しかし人がその主要なるもの、或は少くとも最も直接的に觀察し得るものを、規定しようと試みることは少くとも不可能ではない。

全般に亘つて此の問題を考へて見ると、アウグスティヌス主義の歩みが突き當つてゐる主要な困難はその本質的性格の一、卽ちそれが完成されたものではないといふ根本狀態に、由來してゐるやうに思はれる。例へばトーマス主義と比較して見ると、此の點に關しては、構造上異つてゐることが明らかである。聖トーマス・アクィナスの哲學を敎へねばならなかつたことのある者は悉く、彼が解釋者の想像力に殘した餘白が如何に少ないかを知つてゐる。彼の場合にあつては、人が工夫するものは殆んど一切が誤謬である。彼を解釋することは、何はともあれ、彼を學び、彼を理解することである。それは決して、或は殆んど、彼を完成することではない、それを敢て試みる者は、晩かれ早かれ苦い經驗によつて、人が自己の考からかくの如き巨匠に添加したものが、殆んど常に、凡庸なる智力の誤解に過ぎないことを知るであらう。歷史を通じてトーマス主義が異常に固定したのは實にそのためである、彼の敎說は、完全性そのもの

によつて、殆んどそのまゝ固定せしめられ、その原理の明證に基礎を有ち、嚴密に仕上げられたその縯繹によつて確定せられてゐたので、餘り發展しなかつたのである。トーマス主義の歴史は、今日に至るまで、たしかに聖トーマス・アクィナスの思想の歴史であるが、之に反してアウグスティヌス主義の歴史は、決して聖アウグスティヌスの思想の歴史ではないのである。

聖アウグスティヌスが如何に偉大であるにもせよ——聖トーマスその人は人が彼をその師〔聖アウグスティヌスを指す〕の右に置いたならば意外に思つたに相違ないが、——彼は決して哲學の完全な體系を我々に殘さうともしなかつた。彼も彼の時代もその必要を感じなかつた、また彼の教説の性格は、それを彼が考へだした事情の中に再び置かれなければ、決して理解せられない。今日では聖アウグスティヌスの出發點が何であつたかは想像し難いし、また彼の力によつて第十三世紀の人間には存在しないものとなつた困難な問題、根本的懷疑主義を駁擊したこと、マニ教の唯物論に反對して精神主義を見出したこと、惡の存在の問題を解決したこと、此等の困難な問題から解放せられるため、如何に多大の努力を彼が拂つたかを想像することは容易ではない。人は聖アウグスティヌスが非物質的な實在の單純な可能性や、不完全な世界と完全な神との合致の認識に達するためにも、多數の年月を要したことを、決して忘れてはならぬ。また、此等の根本的な諸原理を骨を折つて征服することが、彼には完全な哲學と等しい價値を有するものと見えたことも、意外に思はれないであらう。蓋しそれは此の征服が理性に、それ以來、基督教的信仰の奥底を自由に動くことを許したゝめである。一度此の樞要な見地を領有するや、それ以來、善く導かれた理性は、それが信仰

の光に從ひさへすれば、容易にその道を見出し得るものであると言ふ確信を得て、彼は此の見地を固守したのである。

實際、聖トーマス・アクィナスが正當に洞破したやうに、聖アウグスティヌスは、プラトン主義の本質的要素を、基督教信者として再考し深化したゞけであつた。彼は天賦の才能をもつてそれをなした、しかしその天賦の才能は體系的であるよりも直觀的であつた。彼は〔プラトン主義の〕諸原理を流布せしめたが、其等を說明しつゝ其等を限定する連續した歸結を與へなかつた、かくして無限なる可能性をゆたかに有つてはゐるが、併し完成しない哲學を殘した、此の哲學は充分な掩護を受けず、そのために甚だ多くの變說を加へらるゝに至つた。アウグスティヌス主義者が稀にしか聖アウグスティヌスの弟子でないことは、周知の事實である、それにも拘らず、人が其れを彼等に非難する時に彼等が抗議をなすのは、決して理由のないことではない、何となれば彼等は確かに出發點を彼に求めるが、聖アウグスティヌスその人でさへしばしば始めることだけで滿足してゐたのであるから、彼等も當然彼を見捨てなければならぬからである。アウグスティヌス主義者達は、師の曲線に卽してゐたことを常に覺えてゐるが、往々にして、いつその軌道を脫したか〔切線の方向に逃れたか〕を忘れてゐる。ヂャンセニウス(Jansenius)、マールブランシュ(Malebranche)、パスカル(Pascal)、ヂェルディル(Gerdil)、ロスミニ(Rosmini)、此等多くの人々はアウグスティヌス主義の切線ではあるがしかし決して聖アウグスティヌスではない。

爰に我々が純粹なる形而上學の領域に限るならば、デカルト的觀念論と存在論とは、アウグスティヌス主義の本質の保全に最も危險な二つの誘惑であつて、アウグスティヌス主義はそれに打ち負

かされたやうに思はれる。

デカルトが、直接或は間接、聖アウグスティヌスの影響を受けたか否か、それは純歴史の問題であつて、諸原典の現狀では、その解答を全く嚴密には與へることが出來ない。他人はいざ知らず我々は間接的影響があつたことを信ずるけれども、それは我々が今立てた問題には餘り重要ではない。デカルトが聖アウグスティヌスを研究したか否かは別として、彼の方法が、彼にその形而上學に於ては、アウグスティヌス的な道を歩かせたと言ふことが眞なることに變りはない。我々は、その逆が眞ではないこと、及び聖アウグスティヌスの形而上學がアウグスティヌス主義者にデカルト的方法を採用せしむるものではないことを示したいと思ふ。序に言ふならば、デカルト的基督教哲學が正當であると主張せられる理由も此處にあるのであつて、此の哲學を人は往々意外に思つたが、而もそれは餘り長くない以前まで榮えてゐた。一切の神學校で、誹謗も受けず、また我々の知るところでは、大なる損傷さへも受けずに、その內容が教へられた諸提要(マニュエール)を進んで吟味するならば、其等のうちで一としてデカルトの方法に從つたものはなく、却つて其等がデカルトの背後に見出して依據となしたものは、聖アウグスティヌスであつたことが知られるであらう。デカルトから「方法論」とそれに連絡する不可能性とを減じたもの、それが聖アウグスティヌスである、また聖アウグスティヌスの主意そのものをも「方法論」に服せしめようとする努力、それがデカルトである。アウグスティヌス主義が奇妙な畸形を與へられたのは爰に由來する、そしてその原理が稀にしか理解せられないからして、その危險は一層大きいのである。

スコラ派の哲學者達がデカルト學派の方法の意味を始終誤解してゐたことは顯著な事實である。

彼等は一般に皮相に停つてゐる、そして彼等には理解の出來ないものとしてデカルトの體系が有つてゐるものに對する正しい感情が、彼等をしてそれを攻擊せしむる時に、彼等が最初の一擊を加へたものは、取り別けて方法的疑ひである。クロイトゲン(Kleutgen)やチリアーラ(Zigliara)は、聖トーマスを取扱ふ場合には非常に鋭くあつたけれども、それ以外に於ては驚くべき程素朴な誤謬を犯してゐる。彼等は認識の基本的な諸原理、例へば因果律の原理や同一性の原理の如きものは、方法的疑ひを脱れてゐることを、恰もデカルトがそれを彼等の前に發表しなかつたかのやうに、立證することを主張する。原理と言ふ言葉は、デカルトに於ては、存在の第一的判斷を意味したのであつて、決して抽象的形式的原理ではなかつたのに、此の語のデカルト的意味を全然誤解してしまつたから、彼等は影を相手に戰つたのである、また彼等が得たものも亦勝利の影に過ぎなかつた。これがおそらく、彼等には非常な自信があつたけれども、人を今日まで餘り信服させなかつた理由を說明するものであらう。實際、彼等は更に一層深くデカルト的形而上學の第一原理たる「我思ふ」の背後に、それを準備した疑ひそのものゝ背後に、進んで數學的方法に達しなければならぬ、此の數學的方法が是等「我思ふと疑ひ」を要求し、デカルトの思想に於てはそれらを正しいものとなしてゐるのである。

デカルトは、本來、次の如き考に試論を企てゝ徹底的に行つた人である、卽ちその考は、形而上學に數學的方法が適用せられる場合には、形而上學には如何なる結果が生ずるか、と言ふことである。我々の見るところによれば、形而上學に生ずるその結果は、それが破壞せられることである。しかしデカルトはかく信じなかつた、反對に彼は

自分が誰れよりも先きに形而上學を救ふものであると信じてゐた、しかし此の幻覺が可能であつたのは、或る方面から之を見れば、アウグスティヌス主義がその試論に加擔したからに他ならぬ。

若し明らかにトーマス的な、一般的に言つて中世的な、一つの原理が存在するとすれば、それは A nosse ad esse non valet consequentia（知ることから在ることは歸結され得ない）と言ふことである、反之、數學者は數學者たる限り A nosse ad esse valet consequentia（知ることから在ることが歸結され得る）と確信してゐる。數學者にとつては、此の歸結は正當であるばかりではなく、是れ以外には正當なるものはないのである、そして彼が取扱ふのはたゞ觀念のみであるから、これ以上當然なことはない。人が是を全然數學的な關係にのみ限定する限り、それに就いては何等の困難も生じないが、彼の方法の作られた目的である實在するものゝ方面に摘用せられると、その方法は多くの困難を惹起せしむる。しかし乍ら彼がその方法を一般的なものとなして、實在するものゝ全體にそれを適用することに決心した時以來、デカルトは異常な困難に卷き込まれた。先づ第一に彼は少しも可能なる理由を主張することなく、諸物の中には數理主義を免れてゐる如何なるものもないことを斷言してゐる。次に觀念をして實在するものを寫さしむる代りに、實在するものをして觀念を寫さしむることに努めたゝめに、たゞ概念を透してのみ諸物を再認し、また思惟以外には他の出發點を有ち得ないことになつた。その時、たしかに、アウグスティヌス主義は形而上學に通ずるたゞ一つの道としてデカルト的數理主義の前に現れたのである。

聖アウグスティヌス自身も亦一つの方法を有つてゐた、それは我々の信ずるところによれば、デ

カルトの失れとは全然異つてゐた、しかしその方法が彼を導いて行つた結果は、新しい〔デカルト〕哲學に利用し易いものであつた。加之、聖アウグスティヌスも亦デカルトの如く疑つた、而も彼は決して單に方法的に、練習的に疑つたばかりではなしに、實在的に、痛ましく疑つた。尙ほまたデカルトの如く、彼も si fallor sum（若し余が誤るならば余は存在する）と言ふ反駁の餘地なき明證によつて懷疑を離れた。最後にまたデカルトの如く、彼も思惟の明證を直接的に把促し、其れより精神の靈性と不死との確實性を導出し、かくしてそこから神の存在を證明した。そこでデカルトは彼の方法によつてトーマス主義の道を閉塞したその時以來、どうしてアウグスティヌス主義のそれに從はないでゐられたであらうか。その道はたゞデカルトに受け入れられることしか求めてゐなかつた。たゞ思惟からのみ出發する權利を有つてゐたデカルトはアウグスティヌス主義の途に上つて、一瞬時も思惟から離れることなしに、傳承的形而上學一切の結論を、彼が信じた如く、外界の存在さへをも、取り戻した。聖アウグスティヌスの哲學が、デカルトの體系の中に入つて行き、デカルトの天才によつて與へられた新しい輝きに浴して、全然自分のものではない方法と結合し、本義に反して觀念論と提携し、表面上勝利を得てその本質を失ふと同時に、その能產力をも失はうとした理由は爰にあるのである。

アウグスティヌス主義の第二の形而上學的切線は存在論である。二つの教說〔アウグスティヌス主義の形而上學と存在論〕を區別することに誰れよりも骨を折つたチリアーラは、しかしながら、いつもの如く忠實に、躊躇することなく次のやうに述べた、「聖アウグスティヌスは、一見すると、存在論に都合がよく、剩へ判然とそれを肯定してゐ

るやうに見える表現を、幾回ともなく用ひてゐる、そのことは私もたしかに否定はしない、何故ならば、それは事實を否定することになるであらうから。」恐らく爰に彼が意味したものは、屹度、單に言葉で表現せられてゐるよりも何か遙かに深い事柄であらう、そしてチリアーラより以上に、聖アウグスティヌスに存在論が、それに近似したものと雖も、あつたことを信ずることなく、彼の敎說の構造そのものに立ち歸つて、此の新らしい汚點を說明し且つそれを拭淨することが必要である。

我々が詳しく說明しなければならぬ理由によつて、一度聖アウグスティヌスが靈魂の存在をその出發點として選ぶや、それ以來、他の一切の精神的實體、取り分けて神、に達するためには、餘儀なく靈魂を通過しなければならなかつた。それ故に既に出發點から、彼の論旨は、遙か後に聖トーマスの形而學を生み出したそれとは非常に異つてゐたのである。確かに、此の二人の敎說の何れに於ても、神が最もよく認識せらるのは、靈魂との類推によるのであるが、しかしトーマス主義とアウグスティヌス主義との間にある罅隙は、靈魂がそれ自身に就いて有つ認識が規定せられるその點に於てさへ、非常に深いのである。聖アウグスティヌスによれば、現に生きてゐるが如き人間にとつては、靈魂の方が肉體よりもよく認識せられる。其れ故に若し思惟が神に歸らうとするならば、その出發點を、或は、ともかくその支點を、靈魂の中に置くのが自然である、蓋し肉體を考慮することは靈魂をそれ自身に立ち歸らしむることにしか役立たない、而も靈魂はそれ自身に立ち歸ることによつて神に至ることが出來るのである。

出發點の此の論旨そのものは、靈魂と肉體との一致に關するアウグスティヌス的概念に基づいてゐるものであるが、かくの如き敎說に於ては、神

の存在の一切の證明は、畢竟するところ、思惟の或る內容に論據を置かなければならぬと言ふことが、其れより直接的に歸結せられる。聖アウグスティヌスも之と異つた可能的な方途を有たなかつたが、しかし彼は是の方向に於て、その對象と結合すべき短い有效な方法を見たのである。神の存在の證明を支持し得る思惟の可能的內容の一は、結果として考へられた神の觀念そのものであつたに相違ない、乃でその原因を發見しなければならぬ。聖アンセルムス、デカルト、ヘーゲルさへも遙か後代に此の道を取つた。聖アウグスティヌスは彼等に先立つてそれを感知し、それを準備さへしたが、しかし自分自身では此の道に上らなかつた、而もそれには恐らく非常に深い理由があつたのであつて、此の研究の先きで我々はそれを規定しようと思ふ。彼が、神の存在に關する我々のうちにある證據として選んだ事實は、眞なる判斷である。周知の如く彼は、眞理を眞理として形式的に規定する必然性・不變性・永遠性と言ふ性格を分析してゐる。眞理を擔ふ主體・卽ち人間・の偶然性と、眞理そのもの・その客體は何であるにもせよ・の必然性との間の二律背反は、一切の眞理の原因たる存續的「眞理」――それは卽ち神である――の存在を許さなければ、決して解かれるものではない。



かくの如き形而上學的分析ほど、特に聖アウグスティヌスその人の原典に於ける〔內容の〕充實した紆曲〔せる議論〕に隨つてゆく時に、人に感動を與ふるものはないが、併しそれは認識論的な重い賦役を負はされてゐる。認識に關する聖トーマスの學說と聖アウグスティヌスの學說とを調和しようと、誠實に、努める者は、彼等の努力の終極に於て聖アウグスティヌスの神の存在の證明を排除したか、或はトーマス主義の中に、その體系の骨

組を變へなければ地位を占め得ない〔神の存在の〕一つの證明を、導入したことに氣が附かない。それは眞理による證明である、しかしその眞理は、聖トーマスが許したやうな、諸物にある眞理ではなくして、思惟にある眞理である。それはアルベルツス・マグヌスも尙ほ許してゐるが、聖トーマスは最早許さなかつたものである。而もその理由は明瞭である。聖アウグスティヌスの證明が充分の效果をもつためには、眞理を認識する人間の知性が、どういふ仕方であるにもせよ、必然的に、眞理の直接的な充足の理由であつてはならぬのである。然るに若し〔人間の知性が眞理の直接的な充足の理由で〕あるとすれば、聖アウグスティヌスには、原因としての神の存在を肯定すべき必要がなくなり、思惟によつて開かれた道は、既にその出口に於て閉鎖せられてしまふのである。しかし疑ひもなしに尙ほ、知性そのものゝ原因として、神を、因果律の系列の中に探ねることが殘つてゐる、アルベルツス・マグヌスはそれをなさうと試みたが、しかし聖アウグスティヌスはそれをなさなかつた、蓋し〔神の存在する〕充足の理由として神の肯定を要求する知性のたゞ一つの活動は、眞理を把捉する作用であるからである。それ故に彼が常に眞なる判斷、若しくは眞理を認識することが出來るものとしての知性——此の兩者は全く同一のものである——に歸つて來た理由はこゝにあるのである。それ故に神の直接的顯在が我々の判斷の中に、謂はゞ陰刻を刻みつけなければ、神の存在の證明も亦あり得ない。此の文を草するに當つて我々は、出來得る限り、聖アウグスティヌスの考へから離れぬやうに心掛けてゐた、しかしたしかに我々が彼の獨特の表現に達してゐないのは言ふまでもない。

かういふ主張の本質となつてゐるものは、終極

的には固よりどのやうな態度で解釋せられるにもせよ、人間の知性の一つの定義であるが、而もかゝる知性をもつて、人は眞理の存在を說明するに足るものであると做すことが出來ない。若し聖アウグスティヌスが、人間は神から知的な光を與へられることなしには眞理を認識することが出來ないものであると、單純に考へたとすれば、人間の思惟の偶然性や不充分性に彼が加へた分析は、的確なる對象を有たぬことになるであらう。併しながら若し、最も重要な原典が相一致して示すやうに、その點に彼の證明の基礎があるとすれば、必然的に――傳承的な名をそれに與へるならば――神的な光明（l'illumination divine）が思惟に直接達しなければならぬ。何となればそれは直接的に達するか間接的に達するかであつて、前者の場合には我々は一擧にして眞理の充足の理由とそれを基礎づける神とを把捉するが、後者の場合には神の存在に達することも、眞理に說明を與へることも、共に不可能であるからである。

アウグスティヌス的形而上學の、中心點たると同時に脆い點が、爰にあるのである。明瞭に聖アウグスティヌスは存在論の對蹠點にあつたからして、充分な擁護を受けなかつた。彼は、遙か後代にヂェルディルやヂョベルティ（Gioberti）がなした如く、彼の軌道を離れようと試みた人々を妨止しようとは、夢想だにしなかつた。彼はそのことを殆んど考へなかつたから、チリアーラその人も承認してゐるやうに、その人々に靜かに武器を供し、或は少くとも口實を與へたのである。我々は神に於て認識すると言ひ、我々は神の祕密なる光を見ると言ふことは、神を我々の思惟の光そのもの、卽ち我々の思惟の自然にして第一なる對象、となすために神祕的直觀を探求することを形而上學者に勸むることではあるまいか、それ故に諸物によ

つて神を認識しないで我々は神によつて諸物を認識するのではないか。此の轉向は第十二世紀の終り以來、アラビアの新プラトン派、特にアウイケンナ(Avicenna)の影響の下に惹起せしめられた。而して聖ボナウェンツラ、取り別けて聖トーマス・アクィナスの力によつて阻まれたが、それは第十七世紀に至つて、デカルト的觀念論の影響を受けて、マールブランシュと共に進歩し、更に第十九世紀には、獨逸觀念論に壓倒せられて遂にその終に達したのである。

かくの如き事情の下にあつては「聖アウグスティヌスの追放」と稱せられる豫期せられない、而もほんたうの歴史的現象を見て、人は驚愕しないであらう。カトリック教の内部そのものに於て、——彼を尊敬し敬愛して兩者の區別をつけることが殆んど不可能な位であつた其の處に於て、聖アウグスティヌスが疑惑を蒙つたといふ現象は、確かに豫期せられないことであつた。またそれは歎かはしき事實でもある、蓋し其れは基督教的思想が内部に於ては分裂してゐると言ふ印象を殘したからである、而もその基督教的思想の不可分なる統一を、それに生きる一切の人々は日々經驗してゐるのである。此の狀態を救治するために、トーマス主義者達のうちには、辛抱强く且つ巧みに、聖アウグスティヌスを己等に引き入れようと試みた者が多少ある。しかしアウグスティヌス主義に於て眞なる一切のものをトーマス主義が評價して等しくよいと、又はよりよいとなすことを示すことが問題である限り、それは決して合法的ではない。しかしかくの如き措置はトーマス主義にとつては危險を伴ふものである、蓋し聖トーマスの誤ることなき手によつて取扱はれない場合には、それは、自己のものではない思想に接觸して、その本質を往々汚されるからである、而も亦それは

アウグスティヌス主義にとつても常に致命的である、蓋しかくの如き措置が成し遂げられる場合には、自己のものとは異れる本質の中に同化せられて、それは消え去るからである。

アウグスティヌス主義者には他の救治法がある。彼等は反對し、攻擊し、現情を布告する。けれどもそれに對して責任を負ふべき者は彼等である。眞のトーマス主義者は、脈路の立つた完全な基督教哲學を準備する、そしてその形而上學的思想とその宗教的生活が、全く自由に、花を開き成長することが出來る風土に生活する。トーマス主義者はアウグスティヌス主義者に、共通の結論の上で結合しようと努める、そしてそれは彼の義務である、しかし自己の途によつてそれと結合することも亦彼の權利である。アウグスティヌス主義者が選んだ道の合法性は、アウグスティヌス主義者がそれを論證する責任を負ふてゐるのであつて、トーマス主義者ではない。而してそれに成功するために、彼がなさければならぬ一切のことは、思ふに、尙一層アウグスティヌス主義者たることであつて、より少くアウグスティヌス主義者たることではない、歷史家は寄托せられた傳承を完全に保存することを職能とするものであるが、哲學者達が彼等自身の仕事を斯樣に等閑にしてゐるのを見て、彼等が無能に終りはせぬかを危懼する。それ故に人は歷史家に、全力を盡してそれに應急の處置を講ずることを許すであらう。（未完）